お　名　前	性　別	終戦時の年齢	現 住 所
山口　房一	男 性	１２歳	新城市 （黄柳野）

「追憶　東三河郷開拓団」

聞き取り　平成２０年（2008）４月
安形利夫さん（黄柳野）

国による勧誘ポスター

昭和１６年，父（一一）は食料増産，北満防衛という国策に従い，ふるさとの黄柳野を後にし，母と私を連れて満州国竜江省甘南県大平山村三合屯東三河郷開拓団に入植することになりました。

昭和１７年２月７日，豊橋から汽車で博多に行き，港から船に乗り，船中で一泊して釜山港に着くと，ここからハルピン，チチハルを経由し，３日目に目的地の「大平山村三合屯開拓団」に着きました。

荒涼とした大平原の中に開拓の部落が点在していましたが，その家は満州人の古家で，土壁，屋根は草ぶきでした。夜は零下４０度にもなるような厳しい自然環境です。こんななか，父母は寸暇を惜しむように開墾地で働きに働きました。そして，生活がようやく軌道に乗り始め，牛，馬，豚などの家畜も増えた頃，戦雲が垂れ始めたのです。開拓民にも召集令状が届き，若い男はあわただしく戦場に駆り出されていきました。やがて学校も閉鎖され，開拓団には老人，婦女，子供がほとんどとなり，窮地に陥ることになりました。

昭和２０年８月１５日の終戦は，少し後で知りましたが，周辺の開拓団の様子は流言，飛語となって伝わってきました。不安と恐怖が日増しにつのり，やがてそれが現実となり，開拓団の部落が襲われ，殺される人も出ました。

敗戦とともに，私たちは敵国人となったのです。匪賊，土賊の被害を防ぐため，開拓部落ごとに交代で警備につきました。匪賊が来そうだとの情報が入ると，小さな子供がいる人はおぶって，原野のくぼ地や大きな草かげに身を隠しました。見張りの知らせで匪賊が立ち去ったと分かると家に戻るのです。そんなことが何日も続きました。家に戻ると，病人や老人は殺されてはいませんでしたが，布団や衣類，食料などは全部持ち去られていました。それでも私の父は，現地の人に親切で優しく接していたので，現地の人に守ってもらうことが何度かあり，助かったこともありました。

着の身着のままという状態になっても，満州の警察と公安隊は全員を本部前に

集め，身体検査といって男女関係なく衣類を脱がせました。その場で良いものを着ていれば取り上げ，反抗すれば銃殺されました。

匪賊に傷つけられた時，開拓団の中に元看護婦だった人がいて，救急箱の中にあるもので傷口を縫い，何とか一命をとりとめたこともありました。このまま三合屯開拓団にいては死者や傷つく人が増えると判断し，近くにある東陽開拓団へ行くことになりました。

向井久美子　「夕焼けの大地」より

移動する時の荷物は，古びた少しの着替えが入った風呂敷包み一個だけでした。この移動の時には，大きな決断を強いられる人たちがいました。一人で二人の子供を連れて行くのは無理だと，門の所へ置いていく人，満人にくれてやる人もいました。また，病気で付いていけない人，満人と結婚する女性もいて，生きるための決断はそれぞれでした。

行動を共にする人は大きな団体となって移動し，東陽開拓団に着きました。そこでは学校の校舎を借りることができ，ひと安心でした。しかし，食物はなく開拓団の人が刈り残した稲を元気のよい人で刈り取り，食べました。

１１月半ば過ぎには，ここへも匪賊が来るようになり，病人の布団をはぎ取ったり，火のついた薪で男の人をたたいたり，もうやりたい放題でした。奪う物もなく，無抵抗でいるとそのうちに帰って行きました。周辺の開拓団に身を寄せ合いながら，凍てつく荒野を逃げるように転々としながら移りましたが，どこにも安住の地はありませんでした。

少しでも治安のよい居場所を求め，チチハル市へ向かうことになりました。昭和２１年８月のことです。徒歩で十数日もかかり，途中で匪賊に会ったり，若い女の人を連れて行かれたりしましたが，温かい満人の救いの手にも守られて，ようやくチチハル市の収容所に落ち着きました。

人による迫害は薄らぎましたが，次の苦難である病魔が待ち構えておりました。吉野屋収容所はチチハルの中心街にありましたが，不衛生この上ないほど荒れ果てており，発疹チフス，腸チフス等の伝染病がまん延し，死亡する人が続出しました。食料にもこと欠き，医薬品もなく，病魔に冒されて死亡すれば破れアンペラに包み，荒縄でからげて弔いました。読経も線香も，一輪の花もなく，野辺の送りといっても野原へ捨てるだけ

向井久美子　「夕焼けの大地」より

で，野犬やオオカミに食われても，どうしようもありませんでした。

目鼻や身体からハエの卵がかえり，ウジ虫となってはい出ている子供，両親を亡くし異国で孤児となり，頼る人も物もない子供たちもいました。

やっと日本人の引き揚げが始まり，チチハル駅に集結して引き揚げ船の出るコロ島までが，また長い旅でした。孤児となった子供たちは，日本に帰ろうと必死に大人の後に付いてきました。貨物列車に人をいっぱい詰め込んで出発しましたが，途中何人もの人が死にました。貨車を止め，死者を野原に置いて，また出発しました。

１週間ほど過ぎた頃，鉄橋の線路がはずしてあり，そこから先は，大勢の人が列になって歩きました。いく日かたって，めざすコロ島に着きました。

この収容所にも大勢の人がいました。１ヶ月ぐらい待って，やっと引き揚げ船に乗ることができました。この時の配給は，乾パン１０個，子供は５個，水ばかり多いかゆで，いつも空腹でした。

船の中で死んでしまう人が何人もいました。やがて，待ちに待った祖国の博多沖に着きましたが，死者とか病気その他いろいろな事情でなかなか上陸することができず，いく日か待っていました。それでも，船の上から博多の夜景を見ることで，本当に帰ってこられたのだと思いました。

汽車で名古屋駅まで来たのが昭和２１年１０月１０日，名古屋に１泊して豊橋に着き，黄柳野に帰ることができました。父は家を売却せず，人に貸していたので戻ることができたのです。いっしょに帰ったのは，父親の一一，母ゆた，それに私です。親兄弟がみんな亡くなった橋本克巳さん（中宇利）や夏目昌儀さん（山吉田）兄弟４人も父親を頼っていっしょに帰りました。父母が５人の子どもたちの親戚を訪ねて預けたそうです。ただ，私たちは家を貸してあったためしばらくの間は家には入れず，納屋で生活することになりました。

生死の境をさまよいながらの長い旅，戦争は罪もない多くの人々を悲惨な目にあわせます。戦争はどこでも，二度と起きてもいけない。今の平和な幸せを，心から感謝しております。

聞き取り原稿を読みやすく修正させていただきました

八名郷土史会　　安形　茂樹